

奥野信太郎隨想全集二



奥野信太郎
随想全集二

江苏工业学院图书馆
藏书章

随筆東京

編集委員

佐藤 朔

戸板康二

村松 暎

福武書店

奥野信太郎随想全集 (全六卷)
(別巻一)

2 随筆東京

定価二八〇〇円

昭和五十九年九月十五日初版印刷
昭和五十九年九月二十五日初版発行

著者 奥野信太郎

発行者 福武哲彦

発行所 株式会社 福武書店

〒一〇二 東京都千代田区九段南二―三―二八

電話 東京(〇三)二三〇―二二二一(代)

振替口座 東京二―八七三七二

印刷 精興社 / 製本 小泉製本

本文用紙 三菱製紙

©1984

シリーズコード
第2巻コード

ISBN 4-8288-1125-7 C 0395
ISBN 4-8288-1106-0 C 0395 ¥2800E
NDC 914 916 292p

隨筆東京

奥野信太郎隨想全集
2

目次

I

彼岸まで

東京暮色

縁日

ミルクホール

露店興亡

寒夜回想

市兵衛町界限

曝書

………
38 33 30 27 22 18 15 9

古フィルムの夢

浅草雑記

酒場今昔記

墨堤雑記

II

場末風流

酒たのし宿の口笛

道玄坂附近

銀座の夜

三田から神楽坂へ

.....
50

.....
54

.....
66

.....
80

.....
85

.....
148

.....
153

.....
159

.....
164

III

バラックと日本人

東京が焼野原だったころ

闇風呂入浴

仇花は散って跡なし

古いランプ

嘆きの手の位置

靴みがきの親娘

みっちゃん

IV

廁通い

.....								
235	226	220	213	207	201	195	188	173

夢は虹のように

消え去った声

菊によせて

夏にしてこの妙境

朝の声

寂寥のない逸楽

風呂敷包み

鸚 鵡

早春花信

三痴のこと

夕ぐれの町

……
240

……
243

……
247

……
250

……
256

……
259

……
263

……
266

……
271

……
274

……
279

解
説

出
典
一
覧

佐
藤
朔

・
・
・
・
・
283

・
・
・
・
・
287

装
幀
井
上
太
郎

I

彼岸まで

「中節菅野派の稽古本『都羽二重拍子扇』の新版が、まだ出ない頃、品少なのために、芸人はもちろん同好の士も、その揃いを手に入れるには、かなり苦労したものである。この向きのものなら、何にかかわらず手もちの多かった、広小路の浅倉屋や御徒町の下吉でさえおいそれと、間にあわすということはむずかしかった。そんなわけで、値段も話にならないほど、とび上ってしまった。」

「自分はとにかく、お稽古のひとたちがほんとうに困ります」

「なんとかならないものでしょうか」

わたくしは菅野序柳とあうたびごとに、よくこんなやりとりを交わすのであった。序柳は、元柳町の川ぞいの二階で、夜おそくまで小机に向っては、丹念に筆写することに余念がなかった。ほかの音曲でもそうであるが、殊に一中節の古い一曲一卷の稽古本は、なかなかめずらしいものである。筆まめな序柳は、他家の架蔵によって、この種のものはもと

より、さらに一中節關係のあらゆる古文献を、渉獵し筆写した。その合間をみて、『都羽二重』を抄写しては、稽古のひとつに与え与えしていた。

わたくしと序柳とは、幼い時から友だちである。だからといって、その友だち甲斐のというほどの厳めしい気もちからでもなく、とにかく『都羽二重』の端本でも見当ったなら、送ってやれば幾分なりとも便利をするだろうと、こう常平生心がけていた。その都度、序柳は喜んでくれたからである。

震災の少し前、わたくしは谷中の笠森稻荷のすぐ傍に住んでいた。俗に六阿弥陀道という、初音町を通して七面坂にぬける通りであった。七面坂を上りきって、少し日暮里へ進むと左手に、田村松魚氏が小さな古玩舗を営んでいた。わたくしは往年氏の著作『北米の花』を愛読したものの一人であるだけに、沈と静まりかえった冬の夜など、ふと七面坂あたりを通りすがったおり、店の奥の古障子に映って見える氏の頭顱の影を眺めては、いろいろな感慨を誘われたものであった。『北米の花』はほとんど永井荷風氏の『あめりか物語』と、相前後して上梓された、興趣深い作品であったが、大して世評にも上ることなく、そのまま湮滅してしまった不幸な書籍の一である。今では知る人も寥々たるものである。

ある年の六七月の頃である。わたくしに、やや明確な季節感が残っているわけは、不思議

議なほど真青な山吹の鬱然たる茂みが、今なお蒼々として眼底に浮かび上ってくるからである。ある日、わたくしがかなり足早に、田村氏の店頭を過ぎ去った瞬間に、たしかに『都羽二重』とおぼしき何冊かを、ちらりと認めたのである。しかもそのまま帰宅してしまいいながら、翌日あらためて再び店頭に立つわたくしであった。

「ああその本なら今し方、若い女のかたがもってゆきましたよ」

と、背の高い婦人が笑いながら答えた。たしか松魚氏の後添であらうとは思うけれど、この婦人が誰であるかは、もとよりわたくしの知るところではない。

「そうですか」

わたくしは少し落胆した。しかしその本を買っていった若いひととは、時々風呂屋で一しよになるから、近所にはちがいないということを教えられた。

そうして幾日か経った。こんなことがあったことも、のんきなわたくしはようやく忘れかけていた。ところが、ふとゆきずりに、初音町のある横町で、一中節『品川八景』のおちついた、といおうより、いっそ寂しげな撥音を耳にした。思わずここだなど、わたくしは足を止めた。拭きこんだ格子戸の前に、葱乎として山吹の茂みが青かった。

それからときどき前を通るたびに、いくらか歩度をゆるめては、そつとなかを窺ってみたが、もう二度と撥音を聞くこともなく、いつもひっそりと静まりかえっていた。

「ええ、あすこの家はごく小さな庭ですが、向島むこうじまの入金の庭から移したっていう青すすきがいっぱい茂ってますよ。この春少しばかりこれを入れましたがね」

ある時、宅にくる植木屋が、縁先でこういうながら、煙管ヤセの頭で目のまえの鶯草さぎそうをさした。この男が偶然にも、村上さん——その家は村上といった——に出入していたのであった。植木屋の語るところによれば、二十三四の美しいひとで、なんでも吉原よしわらのある引手茶屋の娘だそうだが、今では、佐竹に住んでいる俳句を作る人の世話になっているのだという話である。

わたくしは、いつもこの村上という家の前を通りながら、ついその女あるじの姿をみたことはなかった。

そうして夏も大分た闊けた頃である。表に向いた窓が開いていたことがあった。偶然にもはじめてみる家のなかである。胸を躍らせるといっては大げさだが、正直なところ幾分そんな気もちで、ゆっくり歩きながらなかを窺ってみた。ほの暗く小床がみえる。小床には小幅が懸っている。

……あじさいや田の……と、読まれてあとははっきりしない。そのままもう、わたくしはその家の前を通り過ぎてしまったのである。ほんの二三秒間のことであるから。

……あじさいや田の……あとははっきりしなくても、その短冊が抱一の「紫陽花あじさいや田の

字づくしのぬれ浴衣」であることはたしかである。しかしことりと音一つしない、そしてもちろん人の姿など、さらにみえない家のなかであった。

またある晩は、玄関の簀戸を透かして、向う縁の廻灯籠が、黄いろく沈んでみえていた。そのはかなげな、ほの暗い光のうごきに、多分その下あたりで、団扇をつかっているであろう白い手を想ってもみた。やはり人影も、物音も、絶えてなき静けさであった。

その頃田村屋では、毎年夢二の浴衣——夢二に意匠させた花火や雪の模様の——を売り出していた。わたくしの空想する村上さんというひとの夏姿は、そういう時世粧の着付ではおちつきがわるかった。どうしても古風な柄ものを小ざっぱりと着こなして、万事が地味づくりでなければならなかった。一中節の三味線の意地のわるさは、語りくちの後から後から、まるで追いかけるように、手がついてゆくことである。さればこそ決して早解りのする、粋なものではない。むしろくすんだ、そして間のとりにくい妙なところに、そのもち味があるのである。だから語る調子も、華奢な、粋な声よりも、呂に落ちたおちつきの方が、どれだけ身上だかわからない。村上さんの声は、きつと、そういう沈んだ調子のものであるにちがいがなかった……。

こうして次第にそのひとの姿が、わたくしの想念の一隅に、小さな明るみをつくりながら、肉付けされてゆくのであった。

やがて秋に入った。

秋の彼岸すぎ、賑わいの後だけに、谷中界限はことさら目立って、ひっそりとした二三日がつづく。菊見煎餅せんべいの店を斜めに劃かきってさす、午後の日の濃いろ、全生庵ぜんしやうあんの鳩はとのものうげな鳴声、茶屋町の方から下りてくる羅宇屋ワウヤの車のひびき、若い衆が、無雑作に路傍に吐いて去る唾つばの音、もうそういうものがすっかり、季節のうつろいをこめて、人々の心を秋に染め上げてしまう。わたくしは村上さんの家の前を通った。そしていつの間にか表札がかけてかわっていたのに気がついた。『品川八景』の撥音も、『屠竜とりようの技』に出ている抱一の句も、小さな庭いっぱいに生い茂っていた青すすきも、それらは急に遠い後景に沈んでいってしまった感じであった。わたくしの空想のなかに、ようやくできかかった夏姿は、ついに秋のよそおいを得る機を失ってしまったのである。